様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６８１６

研究課題名（和文）共同注意確立活動における指示表現の選択と対話相手の注意の調整

研究課題名（英文）The choice of demonstraive forms and coordination of the addressee's attention in the process of the establishment of joint attention

研究代表者
平田　未季（Hirata, Miki）

秋田大学・国際交流センター・助教

研究者番号：５０７３４９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：人が意図する対象に向けて相手の注意を誘導・調整し、共同注意を確立する過程は、本研究は、言語を用いたコミュニケーションの基盤となる場面として、現在学際的な注目を集めている。本研究では、この共同注意確立場面で最も頻繁に用いられる言語表現である指示詞に注目し、屋内外で収集した日本語母語話者間の自然談話データを用いて、刻一刻と状況が変わるやりとりの中で、話し手がどのような要因に基づき指示詞を選択しているのかを明らかにした。この研究は、これまで国内外においてほとんど研究例がなかった指示詞の接尾辞の運用を分析した点、「注意」という相互行為的な要因を用いて直示的指示と照応的指示の連続性を示した点で新しい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、相互行為場面に根ざした新たな日本語指示詞の意味論的・語用論分析を提示した。その意義は以下の3点である。1つ目に、自然談話データを用いることで、これまでの内省に基づく研究が想定しえなかった指示詞使用の実態を明らかにした。2つ目は、理論言語学と会話分析・相互行為研究の2つの分野にまたがる指示詞研究を行ったことで、両分野の相互交流を促進した。最後に、近年、共同注意場面は人のコミュニケーションを扱うすべての分野で注目を集めており、言語の起源及び文化的進化を考える上でも重要な社会的行動だとさている。本研究は、共同注意場面の研究に欠かせない指示詞について、実際の使用に基づく重要な知見を示した。

研究成果の概要（英文）：Referential practice where participants refer to a referent using surrounding physical information has been well investigated along with the development of analytical technologies and theoretical frameworks for analysis of interaction. In performing referential practice, the most frequently-used and important linguistic expression is the demonstrative. In recent studies, it is assumed that the most basic function of demonstratives is to coordinate the joint attentional focus for communication. In a related vein, this study analyzed the use of Japanese demonstratives in the process of establishing joint attention between interlocutors in spontaneous interaction. Specifically, I focused on the role the qualitative features of demonstratives play in this process and show how speakers select them in order to minimize imposition on addressees based on the status of their attention.

研究分野：言語学

キーワード：語用論　認知言語学　直示　指示詞　共同注意

１．研究開始当初の背景

話者の空間認知と言語表現及び非言語表現の意味機能との関連を分析する Max Planck 心理言語学研究所の space group は、世界規模のフィールドワークの成果に基づき、2000 年前後から指示詞分析のための新たな枠組みを提示している。申請者は、平成 26 年度から 27 年度にかけて、「研究活動スタート支援」（課題番号 26884007）の助成を受け、彼らが指示詞の分析に導入した「注意（attention）」等の認知科学的な概念を用い、日本語指示詞に含まれる 3 つの直示素性（deictic features)、コ系・ソ系・ア系の意味機能を分析し、日本語指示詞が、トルコ語やジャハイ語と同様に、聞き手の注意の存在・不在という対立を意味として持つ体系であることを明らかにした。彼らの意味記述概念を用いて日本語指示詞を分析することで、国語学・日本語学で積み重ねられてきた記述的研究成果を、最新の通言語的な枠組みに位置付けて理解することが可能になった。

ただし、申請者のこれまでの研究は、従来の日本語指示詞研究の延長線上にあり、分析において、実際の会話例も一部用いたが、テキスト分析が主であった。日本語指示詞は世界でも有数の研究の蓄積があるが、その分析手法は研究者による内省もしくはテキスト分析が中心であり、ビデオデータを用いた実際の使用場面の分析はほとんど行われてこなかった。申請者は、実際のやりとりをビデオ撮影したデータを用い、これまでの内省に基づく研究が想定しえなかった指示詞使用の実態を示すこと、また、豊かな記述的研究の歴史を持つ日本語指示詞の研究成果を他言語と比較可能な形で提示することで、MPI の通言語的な指示詞分析の枠組みの発展に貢献することを目指し、本研究を計画した。

２．研究の目的

本研究は、対話参加者が、意図する対象に向けて相手の注意を誘導・調整し共同注意を確立する過程を、自然談話データを用いて詳細に分析し、話者による指示表現の選択に関わる要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、これまで行ってきた指示詞のコ系・ソ系・ア系の分析に加え、それらに後接する-レ、-コ、-ッチ、-ノ、-ウなどの接尾辞の分析、照応による指示の分析、それぞれの指示において用いられる非言語的な情報の分析を加え、対話参加者が言語表現を用いて意図する対象に共同注意を確立する過程を総体として理解することを目指した。

３．研究の方法

２で述べた目的を達成するため、指示場面が生じそうな屋内外の場面において、日本語母語話者間の相互行為の映像・音声データを収集した。収集したデータは、会話分析を専門とする研究協力者とともに書き起こしと分析を行った。分析においては、以下の 3 点に焦点を当てた。

（1）共同注意を確立する過程の抽出

従来の指示詞研究は、研究者が内省により設定した単独の発話を主な分析対象としていたが、本研究では、言語情報、非言語情報、顔や視線の移動などの身体動作を手掛かりとして、データから対話参加者が特定の対象に共同注意を確立させようとする行動の開始から終了までを抽出し、その一連のやりとりを「共同注意確立活動」と呼んで、これを指示詞を分析するための単位とした（図 1 参照）。

（2）指示形式の交替

従来の日本語指示詞研究および１節で紹介した通言語的な指示詞研究のどちらも、分析対象は 1 つの指示詞を含む単独の発話であり、発話場面のどの文脈要素が話し手にその指示詞を選択させたのかを知ることが分析の主眼であった。しかし実際の会話では、1 つの対象を指し示

し、共同注意を確立するまでに、複数の指示表現が用いられることが多い。本研究では、このような「指示詞の交替」に注目し、収集したデータの中から、共同注意の確立までに複数の指示表現が用いられる場面を抽出した。

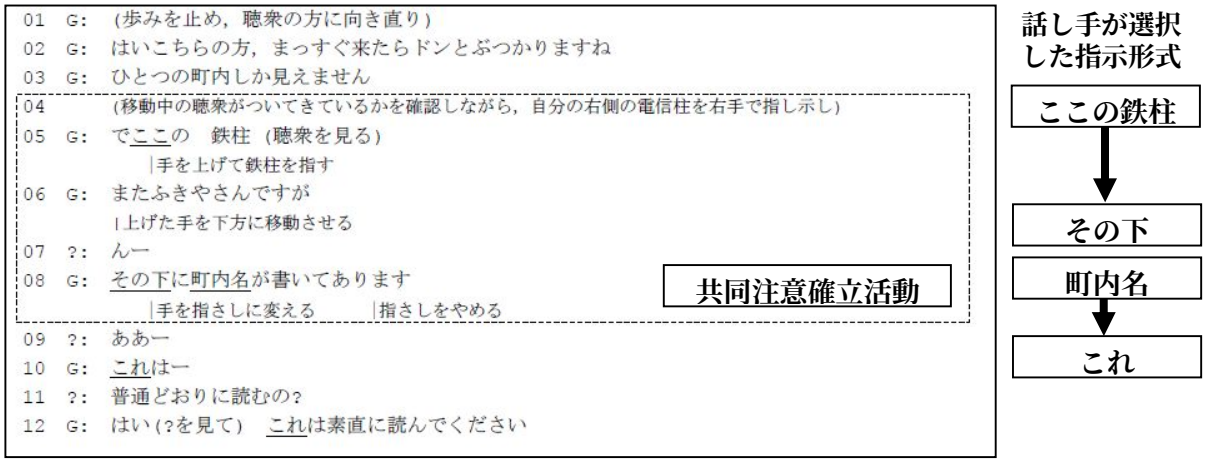

図 1 「共同注意確立活動」と話し手が選択した指示形式の交替

（3）指示表現の直示用法と照応用法（anaphoric use）の連続性の分析

従来、直示用法と照応用法は異なる例を用いて分析されていたが、図 1 に示したような実際のやりとりでは、一連の会話の中で、1 つの対象が、指さしなどのジェスチャーを伴う直示的な指示によって指されたり、先行する言語表現を介した照応的な指示によって指されたりする。この動的な交替は、話者が発話毎に変化していく相互行為的な文脈を参照し、より効率的に共同注意を確立するために、聞き手が対象を特定する上で最も負荷の少ない情報を与えようと試みる中で生じるものだと考えられる。本研究では、直示と照応の違いを、話者が共同注意確立のために聞き手に与える手がかりの違いと捉え、図 1 のような例を用い、両者の連続性を分析した。

４．研究成果

平成 28 年度は、対話参加者が物理的対象に向けて共同注意の確立を試みる直示的指示に、平成 29 年度、30 年度は、直示的指示と照応的指示の中間に位置する指示（眼前に存在しながら既に言語的に言及されている対象の指示）に焦点を当て、収集したデータの分析を行った。

分析においては、３節で述べた通り、指示詞を含む単独の発話のみをみるのではなく、「共同注意確立活動」を分析の単位とし、そこに現れるジェスチャーや身体動作、および指示詞を始めとする指示表現の分布を分析した。その結果、(1) 指示詞の選択には、これまで想定されてきた対象の物理的位置といった静的情報だけでなく、相手の注意やアクセス可能性という相互行為的要因が関わること、(2) 話し手による指示詞の直示素性（コ-、ソ-、ア-）と質的・統語的素性（-レ、-コ、-ッチ、-ノ、-ウなど）の選択は(1)の要因に基づいて統一的に分析できること、(3) 以上の分析が照応的な指示にも拡張可能であることを示すことができた。以上のように、聞き手の注意の調整という観点から、一連の指示のやりとりを分析することで、共同注意場面で用いられる言語情報、非言語情報の組み立てのすべてが、話し手が聞き手に要求する注意の強弱という点から記述できることが分かった。以上の研究成果は、５節で後述する論文に加え、学術図書という形で公開予定である（現在編集中）。

本研究の意義は以下の 3 点である。1 つ目は、日本語指示詞研究の活性化である。日本語指示詞は世界でも有数の研究の蓄積があるが、その分析手法は研究者による内省もしくはテキス

ト分析が中心であり、ビデオデータを用いた実際の使用場面の分析はほとんど行われてこなかった。本研究は、実際のやりとりをビデオ撮影したデータを用い、これまでの内省に基づく研究が想定しえなかった指示詞使用の実態を示した。これにより、指示詞の核となる現場指示用法の研究が発展し、日本語指示詞研究全体が活性化することが期待される。2 つ目に、本研究成果は、会話分析・相互行為研究で盛んに行われている指示行為（referential practice）研究の発展に寄与しうる。会話分析や相互行為研究では、物理的な対象や記憶内の対象を指し示す指示行為の分析が数多く行われているが、そこに頻繁に登場する指示詞の分析においては、従来の内省に基づく国語学・日本語学の記述が無批判に踏襲されてきた。本研究では、ジェスチャー等の非言語行動も含め、相互行為場面で参照される文脈情報を詳細に分析し、やりとりの実際に即した日本語指示詞の新たな意味論・語用論を提示した。この研究成果は、実際の会話や相互行為の分析に適した指示詞分析の概念的基盤を提供する。最後に、本研究は、言語学の立場から、学際的に注目が高まりつつある共同注意場面の研究に寄与しうる。現在、共同注意場面は言語学のみならず、発達心理学、認知科学、脳科学、ロボット工学等、ヒトのコミュニケーションを扱うすべての分野で注目を集めており、言語の起源及び文化的進化を考える上でも重要な社会的行動だと考えられている。本研究では、注意という学際的な概念を用い、共同注意場面の研究に欠かせない指示詞の分析を行った。本成果は、他分野でも応用可能な、分野横断的な分析の枠組みになりうると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

[1] 平田未季・舩橋瑞貴「『注釈挿入』における復帰時の照応表現の選択」『日本認知言語学会論文集』17, 38-47, 2017.（査読なし）

[2] HIRATA, Miki. The addressee’s attention and addressee-anchored proximity: The semantics of the Japanese demonstrative middle term *so-*. *Journal of International Exchange Center, Akita University* 6, 1-19, 2017. （査読あり）

[3] 平田未季「共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択」『語用論研究』18, 28-47, 2016. （査読あり）

[4] 平田未季・山本真理「共同注意確立活動におけるア系の有標性—会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例」『日本認知言語学会論文集』16, 228-240, 2016. （査読なし）

[5] 平田未季「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立」『国立国語研究所論集』10, 19-39, 2016. （査読あり）

〔学会発表〕（計 2 件）

[1] 平田未季「相互行為場面の研究で用いられる指示詞の記述—分野間の交流を目指して」日本語用論学会第21回大会，杏林大学，2018.12.1.

[2] 平田未季・舩橋瑞貴「『注釈挿入』における復帰時の照応表現の選択」日本認知言語学会第 17 回大会，明治大学, 2016.9.10.

〔図書〕（計 1 件）

[1] 舩橋瑞貴・平田未季「日本語学習者と日本語母語話者の口頭発表における言語形式以外のリソース使用—『注釈挿入』を取り入れた授業実践をもとに」柳町智治・岡田みさを (編)『インタラクションと学習』東京：ひつじ書房, 103-128, 2017.